

ペテロの手紙第一4章 「苦しみへの心備え」

1A 罪との断絶 1-6

1B 肉体の苦しみ 1-3

2B 中傷者への裁き 4-6

2A 万物の終わりの整え 7-11

3A 栄誉ある苦しみ 12-19

1B 試練における喜び 12-16

2B 神の家からの裁き 17-19

本文

ペテロの第一の手紙 4 章です。キリストのみこころのゆえの苦しみ、というテーマで、ペテロがこの手紙を書いています。前回、3章では、キリストが肉によって苦しみを受け、死なれたが、それは、霊においては人々を神に導いたのだということを話していました。つまり、肉においては、それは惨めであり、恥に感じてしまうかもしれないが、霊においては力強いのだということです。人の目には見捨てられているように見えても、主の目には要の石になっておられるのが、キリストです。

1A 罪との断絶 1-6

ですから、キリストにつく私たちも、同じなのだということです。4 章は、私たちがキリストと同じ心構えを持ちなさいという勧めになっています。

1B 肉体の苦しみ 1-3

^{1a} キリストは肉において苦しみを受けられたのですから、あなたがたも同じ心構えで自分自身を武装しなさい。

私たちには、肉の性質があります。それは、生まれながらの自分であり、罪と咎の中で死んでいた時の自分です。御霊によって新しく生まれても、なお、アダムから引き継いだ罪の性質を宿している自分がいます。その肉の思いとの戦いを戦うために、武装しなさいという勧めです。ところで、イエス様が肉において苦しみを受けられた時に、ゲッセマネの園での祈りがありました。そこで血のしたたる祈りを献げられました。「願わくは、この杯を過ぎ去らせてください。しかし、あなたの願われるようにしてください。」という祈りです。それと同じ心構えで、肉の思いと戦うのです。つまり、肉が要求してくることを退けて、主のみこころに自分を従わせます。

ところで、ペテロが、福音書の中で、主にお従いするのに、いろいろな失敗をしましたが、そのことをふまえて、この手紙を読むと、とても味わい深いものになります。ここ、自分自身を武装しなさいということですが、彼はゲッセマネの園で眠ってしまいました。それで、迫り来る迫害に備えるこ

とができませんでした。主ご自身を、三度も知らないといって否んだのです。その失敗から、主の憐れみによって立ち直り、この勧めをしています。彼が、上段構えで武装しなさいと言っているのではなく、武装しなければどうなってしまうかを、自分自身が痛いほど知っており、主の憐れみにしたがって、勧めていることが分かります。

^{1b} 肉において苦しみを受けた人は、罪との関わりを断っているのです。

これは、とても興味深いことです。肉において苦しみを受けると、どうして罪との関わりを絶つのでしょうか？これは、自分が試練を受けた時のことを思い出せばよいと思います。とくに生活に問題が起こっていない時は、余裕があるから、何か良からぬことを考えてしまい、肉の欲に溺れる誘惑があります。ソドムは、なぜあのような不自然な肉欲を求めたか？と問いますと、「エゼ 16:49 だが、あなたの妹ソドムの咎はこのようだった。彼女とその娘たちは高慢で、飽食で、安逸を貪り、乏しい人や貧しい人に援助をしなかった。」とあるのです。

しかし、私たちが試練を受けると、信仰者であれば、そこで「主よ、なぜですか？」と問いかけながら、この方に拠りすがろうとします。そして、はっきりとした回答を得ないまま、主が憐れんでくださり、その一步一步を助け、導いてくださいます。その中で、心が清められているのです。主のお姿を、信仰の中で見ることができているし、そのご臨在の中で罪から守られています。

² それは、あなたがたが地上での残された時を、もはや人間の欲望にではなく、神のみこころに生きるようになるためです。

ペテロは、この手紙で、今、地上で生きている期間は短いし、またここが故郷ではないことを教えています。「地上での残された時」なのです。私たちが、自分の余命が短いことを知ったら、むだなことに時間を費やしたいと思いません。最も大事なことを行いたいと願います。優先順位をつけて、しなければいけないことをするのです。

そのことをしっかりわきまえて、それで、「神のみこころ」を行うように努めます。なので、人間の欲望に身を任せる時間がないと言ったらよいでしょう。主の働きに忙しくしていること、みこころを行うことに時間を費やしていることは、逆を返すと、人間の欲望にひかれなくなる守りかもしれません。

³ あなたがたは異邦人たちがしたいと思っていることを行い、好色、欲望、泥酔、遊興、宴会騒ぎ、律法に反する偶像礼拝などにふけりましたが、それは過ぎ去った時で十分です。

ペテロが手紙を書いているのは、カッパドキアやアジアなど、今のトルコにある教会の人々に対してです。ですから、彼らは異教の慣わしに囲まれて生きています。以前の生活は、ここに書かれていることに特徴づけられたものでした。今も、同じようなことが行われていますね。世と世の欲は、

滅びるのです。ですから、過ぎ去った時のものにしようとペテロは勧めています。

2B 中傷者への裁き 4-6

⁴ 異邦人たちは、あなたがたと一緒に、度を越した同じ放蕩に走らないので不審に思い、中傷しますが、

ここで言っている「異邦人」は、今、説明しましたように、単にユダヤ人ではないという意味以上に、まことの神を知らない人々という意味合いがあります。神を知らない人々は、信者たちが放蕩に走らないのを見て、不審に思い、ああだこうだと言います。度を越した飲み会に参加しなければ、何かしら悪く言われますね？

黙示録には、ティアティラにある教会に対する、主のことばがあります。イゼベルという女が、教会の指導者たちをそそのかして、淫らなことを行わせ、偶像に献げた肉を食べさせている、とあります。なぜ、そんなことができたのか？ティアティラは、アジアのある町です。貿易が盛んでした。商人たちの組合がありました。その組合の中で、異教の慣わしがあり、偶像礼拝と淫らな行いがともなっていました。商売をするには、こういったことに関わってもよいのだ教えていたのが、このイゼベルだったのです。何も、この世に対抗する必要はない。軋轢を生むようなことをしないでよいのだ、ということです。ですから、1 節の「自分自身を武装しなさい」という勧めは、自分の心にある欲望の問題だけでなく、周囲から中傷されることを避けたいという恐れもあるのです。

⁵ 彼らは、生きている者と死んだ者をさばこうとしておられる方に対して、申し開きをすることになります。

私たちが悪く言われる時、また他の人と軋轢が生まれることを恐れる時には、「人を恐れるのではなく、神を恐れなければいけない」ことを思い出さないといけません。すべての人をさばかれる主がおられるのです。今、生きている者たちだけでなく、すでに死んだ者たちも、よみがえらせて、最後の審判の被告席に着かせる方がおられるのだということを思い出さないといけないのです。イエス様が言われました。「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」

⁶ このさばきがあるために、死んだ人々にも生前、福音が宣べ伝えられていたのです。彼らが肉においては人間としてさばきを受けても、霊においては神によって生きるためでした。

この箇所は、おそらくは、信仰をもって殉教した人々ではないか？と思われる。「人間としてさばきを受け」というのは、イエス様と同じように、その告白において人の裁きを受けたということで

す。福音のゆえに死刑になったということです。けれども、霊においては、神によって生きています。ペテロがこの手紙で強調していることですが、人によっては卑しいもの、見捨てられたもの、そして裁かれた者であっても、神の目には尊いもの、受け入れられたもの、そして義と認められ、生きている者なのだ、ということです。

あるいは、悪いことをしたために、肉の滅びを招いたけれども、霊においては救われた人々のことを話しているかもしれません。肉の欲に溺れて、性病になった人が悔い改めて、イエス様を信じたということがあるでしょう。私が、カルバリーチャペルにいた時に、新しく信じた方がいました。ユダヤ人でした。彼女はエイズにかかっていると告白していました。今、生きているかどうか分かりません。でも、死んでいたとしても、確実に天に召されていますね。それから死刑になった人も、いますね。本当に自分自身が悪いことをして死刑に定められた人が、生前にキリストを信じています。肉においてはさばかれましたが、霊においては救われていますね。

2A 万物の終わりの整え 7-11

↑万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。

午前礼拝で、この部分をじっくりと学びました。ペテロは、終わりの日、万物の終わりを強く意識して、この手紙を書いています。使徒ペテロも、第一の手紙で「世と世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生きながらえます。(2:17)」と言って、万物の終わりの心備えを教えています。イエス様が、忠実なしもべと悪いしもべの喩えで語られたように、「主人の帰りは遅くなる」と思って、しもべたちを叩き始め、酒飲みたちと飲み食いしていたように(マタイ 24:49)、主が来られるのを心に留めていないと、またたく間に肉の欲に呑み込まれ、罠に陥ります。自分が申し開きする主が戸口におられることを知っているからこそ、恐れ敬って、今、任されていることをすることができのです。

けれども、しばしば終末預言に熱中している人々にありがちなのが、何のための終末預言なのかを忘れてしまうことです。キリストについての教えは、自分たちの欲のために使うことがいとも簡単です。以前、映画「パッション」が上映される時に、私は自分のホームページで、熱心にその映画について書いていました。自分の記事をリンクしているページの中には、SM 趣味のサイトもありました。キリストがむごいかたちで殺されているのを、悪趣味で見ているのです。そこにある、聖なる神のみこころが分からないと、人の欲のために悪用されることさえあるのです。

終末預言も同じです。ノストラダムスの預言と同じように、知的好奇心を満たすために熱中していることもあります。恐れと不安に煽られて、見ていることもあります。あるいは、自分は、霊的な勝ち組にいるかのような高揚感に満たされることもあります。テサロニケ人への第二の手紙では、仕事をせずに、おせっかいしている者たちを強く戒めている箇所があります。主が来られるから、何をしても意味がないと思っていたのでしょう。

終末預言の意味、目的は明確です。それは、初めから主に命じられている事に、熱心になることです。7 節には祈ること、8-9 節には互いに愛し合うこと。10-11 節には、賜物を用いて教会で仕えることです。すべてを評価される方が間もなく来られて評価されるのだから、主に命じられていることにますます熱心になるのです。

万物の終わりが近いので、ここでは祈りにおいて、心を整え身を慎みなさいと勧めています。祈りは自然にはできません。肉は、祈りをいやがります。自分で自分のことをしたいですから。祈りは、自分の生活に神をお迎えすることです。もし、終末預言に興味があって、祈りの生活が遠ざかっているのであれば、自分自身の心の動機を吟味しないといけません。

⁸ 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。⁹ 不平を言わないで、互いにもてなし合いなさい。

互いに愛し合うことについて、「何よりもまず」と言っていますね。ペテロの第一の手紙は、主イエスの教えをそのまま当てはめている者が多いです。「ヨハ 13:34-35 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」私たちが愛し合っているのを見ることほど、効果的な証しはありません。そこに、この世にはない愛を見るからです。これは人間的な愛ではなく、「わたしがあなたがたを愛したように」とあるように、神から来るキリストの愛です。それを見て、世の人が、キリストの弟子であることを認めるようになります。

そして、「愛は多くの罪をおおうからです。」とあります。これは、罪の隠蔽ではありません。悔い改めた罪を、ことさらに後になって持ち出すことはしないということです。赦しに満ち溢れなさい、ということです。ネット上では、教会の罪をことさらに暴くことが、自分の使命だと思っている人々がいます。キリストのからだに連なっていることを知れば、罪は悲しんでも、それを嬉々として言いふらすことはしないはずです。

そして 9 節につながります。私たちは、互いの違いがあって、「不平」が出て来てしまいます。私の友人のアメリカ人の宣教師は、面白いことを言っていました。「愛し合うのではなく、こすり合うことがある。」英語は、Loving each other ではなくて、Rubbing each other になってしまうということです。互いが近い関係になればなるほど、その人の欠点に見えることが増えてきて、摩擦が多くなるということです。けれども、そこで大事なものは、今、読んだ「愛は全ての罪を負おう」というところ。さばくことは主にお任せして、赦して、次に進むのです。そして、忍耐します。

そして、不平ではなく、「互いにもてなし合いなさい」とあります。当時の文化では、自分の家にもてなすということは、親切を示す典型的な行為でした。今でもアラブ社会では、見知らぬ人がやっ

てきても、文句なしにもてなす文化が残っているそうです。つまり、私たちの間で、言葉だけでなく、具体的に行動で、愛していることを示すのです。親切にするということです。

¹⁰ それぞれが賜物を受けているのですから、神の様々な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合いなさい。

賜物についての教えです。「それぞれが」とあるように、だれ一人、賜物が一つもないという人はいません。キリストのからだで、自分は手ではないのだからだに属さないということはないし、この人は手ではないから、からだに属さないとは言えません。

そして、賜物を用いることを勧めていますね。「神の様々な恵みの良い管理者」と言っていますね。ここは、じっくりと味わいたい言葉です。第一に、神はご自分の恵みを私たちに現したいと願っておられます。私たちはもちろん、神の恵みによって、信仰を通して救われました。しかし、その恵みは、御霊による賜物を人々が用いることによって、初めて自分に現実のものとなるのです。ですから、ここで、「神の様々な恵み」とあります。神の恵みは一つですが、それが様々な形で現れる時、御霊の賜物が用いられているからです。

私が、自分が教会に行きよくなったことがありました。まだ、信仰を持っていませんでした。けれども、精神的に、あるいは知的に障害があるのではないか？と思われた男性がいました。不愛想な人でした。けれども、その彼を見て、「僕も行きたいんだ」と思ったのです。立派に見える人々がいるところで、私が行ったら、そこを汚してしまうかもしれないと思いました。けれども、そういうところではなく、素のままの自分が行って、そのままキリストを信じてよいところだと知ったのです。その兄弟にとって、弱さのように見える部分が、かえって尊く用いられたのです。

そして、「管理者」です。主に与えられた奉仕を、任されたものを忠実にやっていきます。私たちは、それを「担当」と呼んでいます。お手伝いをするのと、一つの奉仕を担当するのでは違いがあります。前者は、自分の都合に合わせてやっても、やらなくてもよいものです。後者は、まかされているので、自分の都合に関係なく、主に命じられたことを行うのです。そして、それがすべての聖徒に与えられている召しです。「聖徒たちを整えて、奉仕の働き」をすると、エペソ 4 章にあります(12 節)。奉仕の働きは、奉仕の務めといってよいでしょう。

¹¹ 語るのであれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕するのであれば、神が備えてくださる力によって、ふさわしく奉仕しなさい。すべてにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。この方に栄光と力が世々限りなくありますように。アーメン。

パウロは、コリント第一やローマにおいて、いろいろな賜物を列挙していますが、ペテロは大まかに二つにまとめています。語る賜物と、奉仕の賜物です。語るのは、みことばを取り次ぐことと、賛

美も、言葉によって奉仕する賜物ですね。そして、奉仕は、会計であるとか掃除であるとか、教会の人々に連絡して励ますとか、実際の必要に応えるものです。大事なものは、賜物が与えられているのだから、それを用いなさいという単純さです。できるかできないか、というよりも、すでに、与えられている力があるということです。それを用いなさいということです。

そして、賜物を用いて仕えていると、すべてのことが、イエス・キリストを通して神があがめられます。教会における働きは、世においても同じ働きがあります。掃除は、会社の中でも、家庭でも行われます。でも教会での掃除は、同じ掃除でも、主イエスに対して行うものです。自分自身と主との関係が、その奉仕によって生かされていきます。それゆえ、同じ掃除だとしても、そこで神に栄光が帰されるのです。

3A 栄誉ある苦しみ 12-19

そしてペテロは、再び、キリストのゆえに苦しむことについて、キリスト者の心構えを教えます。

1B 試練における喜び 12-16

¹² 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っははいけません。

ペテロはすでに、試練を「火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり」と言っていました(1:7)。その燃えさかる試練は、精錬されて高価で尊いものになっていく過程なのだから、思いがけないことが起こったかのように、不審に思っははいけないと言っています。例えば、世界では、教会が迫害されています。自分たちがこれまで平穩の礼拝を献げていたのに、突如として、過激派がやってきて、教会の建物が火で焼かれなくなってしまった、というようなことが起こります。

私たちは、どうしても、「キリスト者になれば、主は問題から私たちを守ってくださる」と思っはいます。それを支持するみことばも、多いです。けれども、たとえそうでなくとも、という言葉もあります。信仰をもつても、信仰を持っていない人と同じことが降りかかるのです。しかし、その時に、どうしてそんなことが起こるのか？と不信に思わないでほしいと、ペテロが教えています。

再び、ペテロはこの勧めを、上段に構えて教えているのではないことを知るべきです。彼自身が、不審に思いました。イエス様が、ご自身がローマ当局に引き渡され、十字架につけられるが、三日目によみがえることを告げられた時、ペテロは、イエス様をわきにお連れして、いさめたのです。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。(マタイ 16:22)」不信に思っはしまったのです。

¹³ むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。

キリスト者として苦難を受けるのであれば、いっそう喜びなさいと言っていますが、イエス様の山上の説教を反映のことです。「マタ 5:10-12 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。」大いなる報いが、迫害を受けた者には用意されています。主が再び栄光の姿で戻ってきてくださる時に、歓喜にあふれて喜ぶことになるのです。

私たちがキリスト者として生きていて、受ける苦しみがあります。迫害ではなくとも、受けている試練や苦しみがあります。私たちが、妻が癌の疑いがあった時に、ある知人のクリスチャンがメールで、まさにこの箇所を説き明かしている、牧師さんの動画を送ってくれました。もし罪を犯して苦しんでいるのではない苦しみであれば、キリストの苦しみのものだということです。それは、キリストのゆえに、許されたところの苦しみです。だから、意味があります。そして、その意味をすれば、私たちは清められます。主のみこころを知ることができるからです。

¹⁴ もしキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。

キリストの名のゆえの罵りを取り上げています。5章には、獅子のように悪魔が食い尽くそうとしていると言っていますが、まだ、このトルコの地域では、都ローマで起こっている激しい迫害がやってきていないのです。悪魔が獅子のように食い尽くすというのは、文字通り獅子によって食い尽くされる迫害を、ローマの聖徒たちは受けていました。それが、アジア地方の彼らのところにもやってくるかもしれないとして、5章では警告しています。けれども、基本、アジアではまだ、キリストの名のゆえ、罵られる程度で収まっているようです。

そして、罵られている時に、「栄光の御霊、すなわち神の御霊」が留まってくくださるとあります。それは、栄光のキリストが来られる時の栄光の御霊です。つまり、キリストの栄光が、まだ到来する前から、御霊によってその一部にあずかることができるということです。私たちは、今の時代、御霊によって、将来の希望、栄光に輝く希望を先んじて味わうことが許されているのです。映画の上映前に鑑賞のできる試写会のようにして、前もって栄光を味わうことができるのです。

¹⁵ あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、危害を加える者、他人のことに干渉する者として、苦しみにあうことがないようにしなさい。¹⁶ しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、このことのゆえに神をあがめなさい。

ペテロは繰り返して、教えていることです。二つあります。一つは、罪から離れることです。同じ苦しみでも、罪を犯したことによって受けるものであれば、それは不名誉なことなのです。もう一つは、

正しいことを行っても、キリスト者として苦しみを受ける時があります。その時は、恥じることはないと言っています。むしろ、神をあがめなさいと言っているのです。恥というのは、古代ローマにおいても、我々、現代のアジア人にとっても、大きな要素です。恥をかくぐらいなら、腹切りをしたほうが良いというほど、日本文化の中で沁みついています。けれども、福音を恥としません。キリストのゆえに恥を受けても、よしとします。

キリスト者とは、「キリストの仲間になっている。」ということです。ペテロが、「あなたも、あの人の仲間だね？」と問い詰められた時に、「知らない」と言いましたが、その「キリストという者の仲間だね？」という意味を含めた言葉です。私は、東日本大震災の時に、「イエスのグループ」と、現地の人たちに呼ばれた時は、喜びの驚きを抱きました。神社でも、神さまがいます。けれども、彼らは助けてくれなかったけれども、こちらの神は助けてくれたということです。だから、ただ神と言わずに、「イエスのグループ」と呼んでくれたのです。イエスだったら、こんなことをしてくれるのだということが、現地の人たちに証しされたのです。

これが、罵られたり、嫌な待遇を受けた時でも同じです。恥としないでいなさい、かえって神をあがめなさい、ということです。私自身、学んでいます。思い出すと、西日暮里辺りで、新しく礼拝の場所を探している時に、宗教関係ということで、あからさまに不動産屋から断られました。一つは、決めた金額を直前になって釣り上げてきたのです。屈辱的でした。でも、キリストのゆえに受けるものならば、神をあがめないといけないのです。むしろ、キリストにあつて嫌な待遇を受けるほど、自分たちはキリストを証しているのだとして、喜ぶべきなのです。

2B 神の家からの裁き 17-19

¹⁷ さばきが神の家から始まる時が来ているからです。それが、まず私たちから始まるとすれば、神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか。¹⁸「正しい者がかろうじて救われるのなら、不敬虔な者や罪人はどうなるのか。」

主がさばかれることについて、ペテロは何度となく、この手紙で教えています。私たちは、キリストのゆえの苦しむ時に、神をあがめているのであれば、主のさばきは、そのまま救いになります。主が御怒りを下される時に、私たちを救ってくださいます。

「さばきが神の家から始まる」とは、どういうことでしょうか？これは、エゼキエルが預言した時のころにさかのぼります。その時に、エルサレムでは偶像礼拝が盛んにおこなわれていました。なんと、神殿の中でも、偶像が据えられていたほどです。それゆえ、エルサレムを滅ぼすことを主はお決めになっていましたが、「エゼ 9:4 都の中、エルサレムの中を行き巡り、ここで行われているすべての忌み嫌うべきことを嘆き悲しんでいる人々の額に、しるしをつけよ。」という命令があります。それで額にしるしをつけられた者たちは、かろうじて、その裁きから免れることが約束されています。神の家から裁きが始まるというのは、こういうことです。違いは、その罪を悲しんでいるということで

す。ペテロの第二の手紙にもありますが、ロトはソドムの中で、その罪を見て、正しい心が痛んでいたことを言及しています。それゆえ、主は、ソドムの滅びからロトを救われたことを教えています。

主は、神の家を清められます。信じているのに、主の言うことを聞いていない者たちはどうなのでしょう？主は、憐れみによって、そのような者たちを懲らしめられます。「 I コリ 11:31-32 しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることがないように、主によって懲らしめられる、ということなのです。」地上で懲らしめられることによって、主に立ち返ることがができるようにして、それで、この世に下る裁きから免れるようにしてください、ということです。

このように、主は、神の家から裁きを行われます。その火から、神の家はかろうじて救われます。けれども、その火は、福音を受け入れない者たちの間では燃え尽くす、滅びの火となるのです。私たちは、この世をそのように見ないといけません。どんなに自分の肉を刺激して、罪が楽しいように見えても、世と世の欲は滅びるのです。

¹⁹ ですから、神のみこころにより苦しみにあっている人たちは、善を行いつつ、真実な創造者に自分のたましいをゆだねなさい。

ここで結論です。神のみこころによって苦しみを受けている人たちは、主が苦しみを与えている人々が正しく裁いてくださるのであるから、むしろ憐れむのです。彼らこそが、恐ろしい火の中で苦しむのです。スミルナの教会の監督、ポリュカルポスのことを思い出します。彼は、死刑執行官に対して、こういった人です。「私は 86 年間、キリストに従い続けてきましたが、その間ただの一度も私に不幸をお与えにならず。恵みのみを与えてくださった。こんなにまで私を愛して下さる主を、どうして呪うことができましょう。」そして、執行官は、火で焼き殺されることになるかと脅します。彼は言いました、「火であるとな。それならば、しばらく燃えてすぐ灰になる。本当に恐ろしいのは、来るべき審判の火と永遠の刑罰である。」

ですから、悪に対して悪で仕返しせず、また、恥と思わず、善を行うことに集中するのです。